

## 事業報告書（令和5年度）

事業名 常設まちライブラリー事業

団体名 まちライブラリー奉還町 担当者名 野村泰介

※活動の様子がわかる写真と説明を必ず添付してください。

<b>1. 活動内容（日時、場所、参加対象者、人数、内容等）</b>
<p>1. 常設まちライブラリー 毎週月・水・金・土 11:00-14:00 火～金 15:00-19:00 地域交流ステーション「ベルデ」内に地域の住民や学生が自由に本を読めるスペースを開設。親子向けに紙芝居コーナーを置いた。延べ利用人数 1988 名</p> <p>2. 本の整理ワークショップ 毎月2回実施（第2/4水曜日）実施 寄贈された本にカバーを掛けたり、本棚の組み立てを行った</p> <p>3. イベント「日本語学習者のための日本語多読クラブ」開催 2023年9月9日 日本語学習者用のいろいろなレベルの本を用意し、日本語教師と留学生など外国人と共に 行う読書会を開催。日本人6名・外国人12名の18名が参加者した。まちライブラリー公 式イベント「まちライブラリーブックフェスタジャパン2023」参加プログラム</p>
<b>2. ESDの視点</b>
<p>① 事業を通じて、参加者にどのような気づきや意識・行動の変容があったか 利用者は国籍を問わず幼児から70代までと幅広く、常設の場を持つことで、若者から お年寄りまで広い世代・多様な文化を持つ人が日常的に商店街を利用しながら本を通じ たコミュニケーションを行うことができた。</p>
<p>② どのように学び合いを取り入れたか 本を閲覧するという受動的な居場所としてだけでなく、本棚を作成したり、本にカバーを 書けるなどのワークショップを通じて、主体的に「場を作る」という学びを得ることが できた。</p>
<p>③ どのような学びと実践を結び付ける工夫を行ったか</p>

岡山大学で日本語教育を専門に研究されていた坂野永理先生を講師に、多文化共生の視点を入れたブックトークを開催。中国、ベトナム、アメリカ、ガーナの留学生と共に本を通じた日本語の学びの機会を設けた。ただ「本のある居場所がある」というだけでなく「居場所をどう使う」という視点での実践活動となった。

3. 取組の成果（事業計画書に記載した事業の目的・目標をどのように達成できたか。事業を実施してどのような成果があったか。）

本のある居場所を通じた「多世代との交流やそこに集う人と本の継続的な循環を促す」という目的は、常設で開けるということで、一定の評価を得ることができ、利用者も2022年度に比べ大幅に増えた。利用者の内訳も奉還町を生活圏にする人のみならず、「余暇時間を奉還町で過ごしたい人」や留学生など外国籍の人にも利用していただくことで、「生きた場作り」の実践が可能となった。

また、大阪にあるまちライブラリー本部より、奉還町の取り組みがピックアップされ、全国イベントの参加プログラムとして採用され、公式プログラムに大きく掲載されたことも成果の一つである。

4. 今後の課題と展望（事業がどのように岡山地域のESDの取組と持続可能な社会づくりの発展・継続につながるか）

まちライブラリー奉還町の運営ノウハウを同様の方法で街づくりを考えている地域・団体に拡げることで「本を通じた多世代交流の場づくり」が可能になるという視点で運営した。9月に開催した「日本語学習者のための日本語多読クラブ」は、その後、運営者が自主開催する形となり、10月から毎月1回開催し、2024年2月現在も継続中である。このように、まちライブラリー奉還町に関わった人や団体が、その後、独立し活動を継続させることはESD視点での実践として理想の形のひとつであると考えます。

2024年3月には、「みんなの奉還町書店」の名前で、本を通じた地域交流イベントを1か月間実施予定である。

引き続き、まちライブラリー事業は継続して行っていきたい。



↑常設まちライブラリーの本棚  
←ブックカバーワークショップの様子



↑イベント「日本語学習者のための日本語多読クラブ」の様子